

## 授業科目 学校における支援体制

特別支援教育講座 花熊 暁

受講者数 11名

### 1. 授業の目的

学校における特別支援教育の体制作りの実際を取り扱う本授業科目（後期：2単位）は、コーディネーター専修で学ぶ現職派遣教員が院修了後に勤務校に戻ったときに、また、非現職院生の場合は教育現場に勤務したときに、自身が所属する学校・園や地域で特別支援の体制作りを行う実践力を身につけることを目的としている。

本授業では、コーディネーター専修のカリキュラム中、①他の授業科目で得た情報、②通年で実施している教育実践研究科目（学校実習）での体験、の2つをベースとし、さらに現職派遣教員の場合は、③これまでの勤務経験と勤務校・勤務地域の実情を加味して、これらを総合的に取り扱う中で、「特別支援教育コーディネーターの立場に立ったとき、勤務校や地域において特別支援教育の実施体制をどう作っていくか」という課題を主体的に学べるようにしている。

そのため、本授業では、教員からの知識教授に偏りがちな講義形式を避け、[小グループによる討議→討議内容のまとめと報告→報告内容に対する全員での討論→教員のコメントとまとめ]という演習形式を採用している。そのねらいは、受講者各人が、①特別支援教育の体制作りに関する明確な課題意識を持つこと、②実習校や勤務校における自身の体験と授業での討論課題を結びつけること、③特別支援教育の体制作りに関する具体的なイメージとアイデアを持つこと、である。また、受講生が大学院修了後に特別支援教育コーディネーターの役割を果たすことが期待されている点から、④周囲の理解を得るための表現力とプレゼンテーション力を身につけることも目標とした。

### 2. 受講者について

本授業は、コーディネーター専修の院生を主たる対象としているが、特別支援学校教育専修や他専攻の院生も選択履修できるようになっている。

本年度の受講者数は11名で、内訳はコーディネーター専修8（全員現職）、特別支援学校教育専修2（現職1、非現職1）、臨床心理専攻1（非現職：小学校講師経験あり）という構成であった。

### 3. 授業の内容と展開

本年度の授業では、受講者を3つのグループに分け、討論課題ごとに小グループでの討議とグループごとの発表を行った。グループ討議結果の発表にあたっては、プレゼンテーション力を高めるために、パワーポイント使用にあたって、①発表時間の厳守、②発表時間にマッチしたスライド量の考慮、③一目見て言いたいことが分かるような図式化されたスライドを作成すること（文字量を少なくすること）、の3つの条件を課した。

#### <本年度の授業における新たな工夫>

##### (1) 討論テーマの設定における工夫

授業の始めに、受講生から教育実践研究科目（学校実習）における問題点や課題の報告を最初にしてもらった点は昨年と同様であるが、報告の中から今学校現場で切実な課題となっている問題を重点的に取り上げることで、問題意識と課題解決への意欲が高まるように工夫した。

##### (2) 学校種の違いを考慮したグループ設定の工夫

本年度は、現職教員9名のうち、小学校教諭4（講師経験者1を含む）、中学校教諭2、高校教諭2、特別支援学校教諭1と所属する学校種が多岐に渡っていたため、討議内容によって学校種ごとのグループ分けと学校種にまたがったグループ分けの両方を採用し、できるだけ多くの情報交換ができるように工夫した。

#### <討論テーマ> ○数字は討議・発表の時間数

##### (1) 学校実習における問題・課題の報告 ③

##### (2) 授業が成立しにくい学級の支援 ②

##### (3) 通常の学級における学習に困難がある子どものクラスワイドでの支援 ③

##### (4) 通常の学級における行動に困難がある子どものクラスワイドでの支援 ③

- (5) 児童生徒どうしが「個の違い」を認め合い、  
尊重し合える学級集団づくり ③  
(6) チームアプローチのあり方 ①

#### 4. 授業評価アンケートとその結果

授業終了後に、①学校における特別支援教育の体制作りに関する課題が理解できたか、②討論のテーマと授業内容に興味・関心が持てたか、③学校現場に戻ったときに実際に役立つ授業内容だったか、④授業の進め方は適切だったか、⑤教員の解説やコメントは適切だったか、⑥本授業のような討論・発表中心の進め方の授業についてどう思うか、⑦本授業のような形式・内容の授業は特別支援教育専攻の授業科目として適切だったか、⑧本授業に対する感想と改善が必要なところ、の8項目からなる授業評価アンケートを実施した。項目①②③⑤⑦は5段階の評定、⑧は自由記述形式である。④⑥は2段階の評定とし、「改善が必要」とした場合の自由記述欄を設けた。以下にアンケート結果をまとめる。

①については、「よく理解できた」1、「かなり理解できた」9、「どちらとも言えない」1で、学校における特別支援教育の体制作りでいま何が課題となっているかについての理解を深めるといふ本授業の目標はほぼ達成できたと考える。「どちらとも言えない」と回答した1名は、他専攻の院生で、自由記述欄で「専攻が異なるので知識が十分でなく、少し難しいと感じる所もあった」と述べていた。

②の討論テーマと授業内容への興味・関心については、「非常に」と答えた者が6名、「かなり」と答えた者が5名で、概ね目標が達成できたと考えられるが、取り上げたテーマによって、受講者間の興味・関心に若干の差が生じたようである。

③の「学校現場に戻ったときに実際に役立つ授業内容だったか」については、「非常に」7、「かなり」3となったが、「あまり」と回答した者（現職教員）が1名いた。本回答者は、⑥と⑧の自由記述欄で、「討議ばかりでなく、もう少し教員からの講義を聞きたい」と述べていた。

④の授業の進め方については、全員が「適切」と回答しており、討議の際のグループ分けやプレゼンテーションの方法等については、受講者が満足できるものだったと言える。

⑤の教員の解説とコメントについては、全員が「適切」と回答しており、教員の授業内での役割に特に問題はなかったと考えている。

⑥の「本授業のような討論・発表中心の進め方の授業についてどう思うか」については、「よい」

とする者8、「もう少し講義的な内容を取り入れるべき」とする者3で、やや意見が分かれた所である。後者の回答の自由記述欄を見ると、「教員の経験事例等も含めて、討議の後のまとめとしての講義が欲しい(2名)」、「全国の先進的な取り組み例を紹介してほしい」等の記載があった。

⑦の「本授業のような内容・進め方の授業は特別支援教育専攻の授業科目として適切だったか」は、③と同様に、授業担当教員として最も重視している調査項目であるが、「非常に」5、「かなり」4、「どちらとも言えない」1であった。残り1名は他専攻の院生で、「この質問については判断できない」と回答していた。

⑧の本授業の感想と改善点に関する自由記述では、「特別支援の体制づくりでは小学校の事例ばかりが取り上げられているが、本授業では中学や高校についても検討できて良かった」、「異なる学校種間で討議できたことが有意義」等の学校種間の情報交換の機会となったことをポジティブに評価する意見が多かった一方、以下のような意見も述べられていた。

- (a) 現職教員が多いのだから、学校実習で感じた課題だけでなく、自己の職場で感じている課題を報告する機会もあると良いのではないか。
- (b) 討議テーマがやや抽象的である。もっと具体的な事例について討議すべきだ。
- (c) 体制づくりがうまくいかなかった事例等も取り上げてその原因を検討すると、もっと理解が深まるのではないか。

その他、本授業の目標の1つであるプレゼンテーション力の向上については、複数の院生が「プレゼンテーション力が向上した」。「現場に戻っても本授業での発表経験は役立つ」とのコメントを寄せていた。また、本授業の受講生の中には、現職経験がない学部からの進学者1名がいたが、本院生からは「現職教員と一緒に特別支援教育の体制作りの課題を考えることができ良かった」とのコメントがあり、現職教員以外の院生の授業評価に大きな問題はなかった。

#### 5. 次年度にむけての課題

以上のように、授業評価アンケートの結果は良好で、本授業の目標は概ね達成できたと自己評価されるが、演習形式の授業において授業者側からの最新の情報や知識の提供をどう取り扱うかという点、また、受講者の指摘内容(a)~(c)にあるように、討論テーマの選定のしかたや現職教員である受講者の現場経験を授業にどう取り入れるか等に一層の工夫が必要だと感じた。